

令 5 年度第 3 回松阪地域定住自立圏共生ビジョン懇談会

日 時 令和 6 年 2 月 16 日（木曜日）14 時 00 分～16 時 00 分

場 所 松阪市役所 議会棟 2 階 第 3・第 4 委員会室

出席者 深井委員、福本委員、川口委員、岡本委員、成岡委員、山下委員、小笠原委員、坂東委員

事務局 川上経営企課長、小川政策経営担当主幹、西山政策経営係長、長井政策経営係員、多気町企画調整課職員

傍聴者 1 人（内報道 1 人）

事 項

1. 資料説明

(1) 三重県における移動（転入・転出）の理由に関するアンケートより

2. 協議事項

1) 移住促進を進めていくうえでの医療・教育・観光・産業分野の在り方について

3. その他

【議事録】

（14 時 00 分開始）

事務局）

ただ今より、令和 5 年度第 3 回松阪地域定住自立圏共生ビジョン懇談会を開催させていただきます。本日はお忙しいなか、ご出席いただき、誠にありがとうございます。

それではまず始めに、お配りさせていただいております本日の資料の確認をお願いします。

・事項書

・資料 1 三重県実施の移動者調査の集計結果（定住自立圏への転入者）

・資料 2 「住民基本台帳人口移動調査」（転入者）

もし不足がございましたら、お申し出ください。

では、始めに皆さまにお知らせいたします。本会議は原則公開するものとし、会議録作成のために、会議の状況を録音させていただきますので、あらかじめご了承ください。

本日は三浦委員、平岡委員、渡邊委員、酒井委員、阪井委員、佐々木委員より欠席の連絡

をいただいております。

設置要綱 6 条の規定の委員の半数以上の出席を満たしておりますので、開催要件を満たしていることを報告させていただきます。

では、続きまして、議事に入りたいと思います。設置要綱第 6 条の規定により、この後の進行につきましては、深井会長にお願いをさせていただきます。

深井会長、よろしくお願いいたします。

会長)

それでは、協議に入る前に、事務局から今回のビジョン懇談会の主旨について、説明願います。

事務局)

失礼いたします。

今回のビジョン懇談会については、第 2 次共生ビジョンに掲げる圏域の将来像において、人口の社会移動が多い 20 代・30 代の移動実態について把握することが重要であるとあり、三重県の転入・転出理由に関するアンケートデータを基に、圏域への移住促進を進めていくという視点で委員の皆さまからご意見を頂戴したいと存じます。

なお、今回委員の皆さまに配布させていただいた資料については、深井会長に作成いただいた資料となります。

よろしくお願いいたします。

会長)

それでは、事項書に沿って進めていきたいと思います。

まずは、2 つの資料について、資料 2 から見ていただいたほうが分かりやすいので、資料 2 をご覧ください。

資料 2 は、住民基本台帳人口移動調査という、政府の責任のもとで集計されている正式なものです。

今回、圏域 1 市 3 町の転入者を中心に集計しています。

ちょうど真ん中に新型コロナウイルス感染症の影響があった、2018 年と 2022 年の 2 か年を比較しており、新型コロナウイルス感染症の影響前後という形で集計しています。

資料 2 の 1 ページが 2018 年、2 ページが 2022 年の全体像です。

まず資料 2 の 1 ページと 2 ページは同じ構成となっています。1 ページの上部が実数となっており、その実数をパーセンテージにしたのが次の表です。それを可視化したものが最後の棒グラフとなっています。それを 2018 と 2022 年で比較しています。

1 ページの一番上の表ですが、これは男女計で集計しています。

松阪市、多気町、明和町、大台町のそれぞれ総数、from 県内、from 県外とあるのは、こ

これは転入者の数です。松阪市で見ると、総数が松阪市の転入者総数です。横軸は年齢を 10 歳毎に分けてあり、全体として 2018 年に 4,337 人の方が住民基本台帳上、人口移動していることになります。

4,337 人のうち、県内の他市町から松阪市に移動された方が 2,387 人、県外から松阪市に移動された方が 1,950 人というように見ていきます。

それをさらに 10 歳毎の年齢階層ごとに分け、総数 4,337 人の内訳となっています。同じような形で 1 市 3 町分をまとめています。その下が、パーセンテージにしたものになります。

例えば、松阪市であれば 0～9 歳の方が総数 398 人移動しているので、そのうち県内から移動された方が 398 人のうちの 219 人で 55%、県外から移動された方が 398 人のうちの 179 人で 45%というような形で表されています。パーセンテージで各年齢階層別移動者の、県内・県外のパーセンテージの比率を取ったものが 2 つ目の表となります。

この 2 つ目の表を棒グラフとしたのが一番下のグラフとなります。

資料を見ていただきますと、松阪市の場合はこの年代を見ても大体半々ぐらいの割合で、県内・県外から転入しています。

一方で、大台町や多気町は若い世代は県外からも結構転入者がいるという印象です。例えば、多気町であれば 20 代の方のうち県内から 56%、県外から 44%の転入となっており、それ以外は基本的に県内からの転入者が多いというのが特徴です。

明和町は、どちらかと言うと 20 代から 30 代までの方も県内からの転入者が多いという形で、後で転入者の内訳を見ますが、結論から言えば松阪市・伊勢市のベッドタウンのような状況になっています。

今見ていただいたのは、2018 年で、次ページが 2022 年になります。

傾向的に、子供を目的として転入される方が県内からなのか、県外からなのかに注目しながら見てきたのですが、それほど大きな傾向の変化はなかったように思います。

大台町で県外から 40 代の方の転入が増えてきています。ただ、2 か年を比べているだけなので、そういうような傾向の変化があるとは言えないと思います。

他の市町においてはそれほど大きな変化はないのですが、大台町に関しては県外からの転入の方が増えたのかなという印象があります。

3 ページが転入・転出についてのデータです。3～5 ページまでが松阪市、6～8 ページが多気町、9～11 ページが明和町、12～14 ページが大台町となっており、構成は同じです。

まず、松阪市から見ていきます。2018 年と 2022 年を 10 歳階層別に転入・転出の超過数をまとめてあります。

例えば 2018 年で見えていただくと、二重線で仕切りをつけてありますが一番上が男女計となっています。下のほうを見ていただくと転入-転出となっていて、2018 年の松阪市男女総数の転入-転出が-332 人になっていて、上の転入総数 4,337 から転出総数 4,669 を引いた数字となっています。転入総数から転出総数をそれぞれ年代別で引いていってその差を転入

超過・転出超過として表しています。

そのような形で上から男女計、男性、女性と分かれていて、下が 2022 年の同じ構成のものとなっています。

4 ページが松阪市における県内の転入者を 10 歳階層別に見た時、どの市町から来たのかわかるようになっており、例えば、0～9 歳の男性が津市から松阪市に 40 人転入してきたこととなります。この表は右側が 2018 年、左側が 2022 年となっています。

同じく、今見ていただいている表を棒グラフで可視化したものが 5 ページで、後は同様に多気町・明和町・大台町分となっています。

一つの特徴としては、松阪市の転出者を 2018 年と 2022 年で比べると、2018 年男女計の転出超過が 332 人だったのが、2022 年は 884 人と増えています。

総数を見るとあまり変化をしていませんが、2018 年と 2022 年の転出者を比べると、転入者が減ったことによって、転出超過が拡大しています。

特にその数字が大きくなったのが、一つは 20 代です。20 代の転出超過が-155 だったのが-647 まで大きくなっています。年代別に見ていった時に、転入・転出超過を見ていくと、転入者が活発に動いているのは、やはり 20 代・30 代です。

松阪市の場合、転入は県外と県内が半々ぐらいの割合となっています。やはり仕事関連で動かれる若い方が松阪市は多いようで、このあたりの方をどうするのか考えていけないのかなと思います。

ただ、今はまだ 2 年間の比較しているだけなので、結論的なことを言うてはいけませんが、2018 年と 2022 年を比較すると松阪市に関しては転出者が非常に増えているのが気になります。

新型コロナウイルス感染症で留まっていた人が移動し始めて転出が増えたのか、たまたまこの年だけ増えたのか分かりません。ただ、こういった年代の方々がたくさん移動しているのか見ると、やはり 20 代・30 代の方が非常に多い。当然 10 代・10 代未満のところは付随した子供たちということになると思うのですが、やはり 20 代・30 代以上の方の移動が非常に大きいので、その方たちに留まっていただくようにすることがひとつの手段なのかなと思います。

6 ページの多気町について総数を同じように見ていただくと、2018 年は 26 人の転出超過でそれに対して 2022 年は 19 人の転出超過となっています。

これもあくまで 2 年間の比較という前置きで、結論としてはいけないのですが、多気町は 2022 年で 30 代のところが 27 人の転入超過になっています。一昨年に比較した時の傾向としては、多気町はどちらかというと全体的に転出超過だったと思うのですが、30 代以降などで転入超過となっており、新型コロナウイルス感染症の影響等で変わったのかもしれない。

8 ページを見ていただくと、多気町の場合もやはり松阪市と同様に他の年代と比べると 20 代・30 代の移動が多いです。

次は明和町です。明和町も 2018 年の総数を見ていただくと、96 人の転入超過になっており、2022 年が 99 人の転入超過になっています。明和町は 11 ページを見ていただければ分かるように、転入してきているのは 20 代・30 代が特に多いです。10 ページの数字を見ていただくと、2022 年の 20 代の転入先が多いのは伊勢市と松阪市です。伊勢市の男性 26 人、女性 21 人、松阪市も男性 21 人、女性 27 人となっています。他は津市が多くなっています。

最後、大台町ですが 12 ページです。大台町は他の自治体と比べると、少し傾向が違います。2018 年時点では 33 人の転出超過だったのですが、2022 年は 14 人の転入超過となっており、この 2 か年だけを比較すると、転出超過から転入超過へ変わっています。20 代は転出が多く、30 代はそんなに変わっていないのですが、10 歳未満と 10 代の子供のところの数が増えていて、これが転入超過をもたらしているという結果になっています。

ただ、何度も言っているように単にこの 2 か年だけの特徴なのか、それとも大台町の転入者が増えきたのか。この 2 か年に関しては、2018 年と 2022 年では少し違う傾向が見られると思います。

それでは、転入者がどこから来ているかに関して 13 ページです。人数が少ないのであまり傾向的なものは読み取りにくいのですが、若い世代で言うと松阪市が少し多いかといったぐらいで分散した形でいろいろなところから入ってきています。

2022 年と新型コロナウイルス感染症拡大前の 2018 年と 2 か年を比較してみましたが、一つのこの圏域の特徴として、やはり 20 代・30 代の移動が多いことはどの自治体でも共通しています。松阪市は県内・県外から半々ぐらいで人が来ているのに対して、多気町・大台町もどちらかと言えば県内の方が多く、明和町は県内の方が多いが、若い世代が県外から来ていたりもするという傾向にあります。

20 代・30 代の人口移動がこの圏域は活発ということが、第 2 次共生ビジョンを策定する際に見えてきていましたが、改めて 2022 年の結果で確認したということになります。

その時に、この 20 代・30 代の転出した方の理由は何なのか知りたいと話していました。

特に、25 歳以上ぐらいから特に 30 代前半ぐらいの方々というのは、社会人経験を積まれているので、即戦力として活躍してくれると思います。そういった方の年齢層が結構活発に移動されているので、その人たちに残ってもらえるような形になっていけばいいと思います。また、当然この年代の方は子供を作ったりしているので、世帯として考えないといけないことになってきます。そういったことを想定しながら、圏域の共生ビジョンとしてどのような地域づくりをしていけば良いのかということを考えていけばどうか。というようなところをお話いただこうと思います。

それで、20 代・30 代の方が移動されている理由を知りたかったのですが、それが新型コロナウイルス感染症の流行によって予定が飛んだりしたのですが、新型コロナウイルス感染症の流行が明けてから改めて一度事務局と話をしていた時に、三重県が独自にアンケートを行っていることが分かりました。市町が独自に二重でアンケートを行ってもいけないので、県にお願いをしてデータを提供いただき、それを集計したものが資料 1 となります。

県の調査は今年からスタートしておりまして、データとしては 2023 年 3 月分からとなっています。やり方としては、三重県内の市町の窓口で、転入・転出等された方に報酬付きの形でネットで回答していただくというものです。

ただ、転入してきたばかりの人は忙しいと思うので、よほどの思いがない、回答していただくのも難しいかと思います。また、回答方法がネットなので、年齢的な制限があったりとか、そういった障害も出てくるかと思います。

そのため、なかなか完全なデータではないのですが、一応とりあえず参考になるものという形で資料 1 をまとめました。

今回提供してもらった最新のデータとしては、2023 年 10 月末現在のものになります。

今回は、転出者の回答があまりないので転入者のみに焦点を絞りました。

転入者の回答数は 115 件。三重県全体では 2,810 件。その 115 件の内訳として、県外から圏域の 1 市 3 町にみえた方、三重県内の他の市町から圏域の 1 市 3 町にみえた方となっています。

2 番は転入者の移動元内訳で、松阪市で見ると総計が 96 人。そのうち津市から移られた方が 26 人で伊勢市からが 11 人です。

表の下部で主な転入理由を聞いており、to と from がありますが、松阪市へどこから移ってきたのかまとめています。多気町・明和町・大台町に関しては、回答数が少なく、選択肢がこれだけあると分散してしまっておりあまり意味がないのでとりあえず 96 人の回答者がある松阪市だけで見ると、就職・転職・転勤。転勤が一番多いですが、雇用関係で移動されている方、それから結婚が合計 10 です。次に多そうなのが、住宅の取得で合計 7 です。

次に、3 番が主な転入者の年齢階層別に分けたものになります。主なというのは、県の調査は移動している世帯の転入の理由を発生させた原因という見方としています。例えば、20 代・30 代のお父さんの転勤が世帯の移動を発生させた原因とします。そうすると、主な転入者の年齢階層としては、20 代・30 代で集計されます。資料 2 のデータでも裏付けされているのでそのままでも良いと思うのですが、もしかしたら高齢者の方も一緒に世帯で移られている可能性もあり、若い人が世帯を代表して回答している場合もあります。

同じくその下の主だった理由のところです。松阪市だけの 96 人のサンプルになりますが、転勤が 21。就職 12。結婚 12。その他 11。このあたりが多いです。このことから、雇用関係あとは結婚を機に動かれている方が多いのかと思います。

2 ページです。松阪市・多気町・明和町・大台町それぞれについて、主な理由別・年代別に分けてまとめてみました。松阪市の次にある程度サンプル数が多いのが 12 人の明和町なのですが、主には就職・結婚・住宅の取得です。サンプルが少ないのでこれだけでは何とも言えないのですが。

主な理由としては、やはり雇用関係、それから住宅取得関係が多いのかなと読み取れます。

3 ページの 4 番転入先が出身地であるか定住予定であるかについて、これを見ると松阪市の場合は出身地である方は 96 人のうちの 30 人で、出身地でない方が 66 人になっています。

調査のやり方のバイアスがかかっているかもしれませんが、出身地でない方の回答の方が多かったことになります。

転入先で定住予定・定住する予定はない・未定なのかを聞くと、定住予定・未定が多く、定住する予定はという方は少ない。やはりバイアスがかかっていると思います。というのは、定住するつもりがない方が来て、手続きをしてアンケートに答えるかという、なかなか難しいと思います。そのあたりはバイアスがかかっている可能性はあります。

一方で、定住ないしある程度腰を落ち着けてみようかなという予定ないし未定の人が主に回答しているのかなという視点で見ればいいのかと思います。

下部の表が、出身地なのか・出身地でないのか、それから定住予定なのか、そこに理由別でクロス集計したものになります。

サンプルの数が少ないので松阪市と明和町だけに絞っているのですが、出身地で移られたという方が松阪市で見ると転勤が多いです。定住予定かどうかに関しては、未定になっている方が多く、23 人の内 12 人が転勤で松阪市に移ってきたけれども、定住するかは未定という方になります。

定住する方の理由は、結婚、住宅取得の比率が高いです。例えば、松阪市の結婚で移られた方は 14 人のうち定住予定が 7 人。住宅取得の 7 人のうち 7 人が定住予定となっています。

大きな理由としては、仕事と生活を立てるために移ってきたのではないかと思います。

もう一つ多かったのが、その他ですね。松阪市 14 人のうち 7 人が定住予定。その他の理由が何だろうかということで、自由記述の記載があった部分を抽出してまとめてみました。

移動元がそれぞれの一覧で、移動先が松阪市です。出身地について、Y は出身地、N はそれ以外の地域です。定住予定かについて、Y は定住予定。それ以外は未定です。また、同時に移動したのは誰ですかという設問があり、移動のきっかけという形で一番右が自由記述の部分になります。

移動のきっかけとしてみていくと、特殊なものもありますが同棲という回答が多かったり、生活の形成が理由での移動が多いのかなという印象です。

3 ページの一番下の表については、出身地か出身地でないのか、定住の予定についてクロス集計してみました。

出身地で定住予定の方が多いかといわれると決してそうではなく、出身地でない方で定住予定の方の比率が高い結果となりました。出身地だからこそ定住するという考えはこの回答者からは読み取れないということになります。

4 ページですが、今度は子供を伴っている方に限定し、パートナーあり・パートナーなしとでその中身を子供あり・子供なしで分類して集計しました。

その下が、同じく子供あり・子供なしで分類し、主な移動理由を集計したものです。

サンプルが少ないので、これだけで何かを言うわけにはいかないですが、子供ありでは住宅の取得や転勤が多く、子供なしの場合は仕事関係が中心です。

6 番の雇用関連の転入者ということで、雇用関連で転入されている方が多いので、雇用関

連の方のみに絞り込んで見ていったのが、(1) 求職において重視した点です。それからもう一つは生活形成すなわち結婚とか妊娠・出産など、子育て、それからあとは住宅の取得。それだけに絞り込んだのが(2) 生活環境関連で重視した点です。

県の調査では、求職において重視した点を 3 つまで選択してくださいという形になっております。それと各市町とクロス集計してみたものが、4 ページの(1)となります。これだけの情報ではなかなか何とも言えないのですが、全体的な傾向としては、希望職種や業種を重視したという回答が多かったです。

5 ページになりますが、ここでは生活環境関連で重視した点は、通学・通勤の利便性、日常生活が便利であること。それから、友人知人がいるかどうか。実家に近いまたは戻る。といった項目の回答が多いです。

聞き方の選択肢が県の指定したもの以外ないので、これ以上踏み込めないのですが、このような集計結果となっております。

5 ページの下欄は、結婚・離婚、妊娠・出産、子育てを理由とした移動で、生活環境で何を重視したかですが、通勤・通学の利便性、実家に近いまたは戻る。日常生活が便利であること。それに続いて住宅価格が手頃。友人知人がいるといった項目が全体回答数が少ない中での多い回答となっております。

県独自の質問項目なのでこちらの意図していることに対する回答が全てあるわけではないのですが、20 代・30 代の方が多く移動されている理由としては雇用関連、生活を組み立てるといったところにあるのかなと思います。

資料に関してはこれぐらいにしたいと思います。このような移動実態ということを踏まえていただき、第 3 次共生ビジョンを策定していく中、移住促進という視点から 1 市 3 町で取り組んでいけばいい、ないしはこういったことをしていけないといけないのではないかなというような点について、本日自由にご意見いただければなと思います。まず資料等で何か質問がある方がみえるでしょうか。

委員)

この転入理由というものは想像できますが、この圏域独自のものなのか、三重県全体で見た時とどう違うかで、強みや弱みが見えてくるかもしれません。三重県全体で見た時も同じような傾向なのでしょうか。

会長)

今回は資料作成時間も限られていたので、圏域のものを作成いたしました。三重県全体のものはやってみないと分かりませんが、おそらく北勢・中勢地域は同じような感じになり、南勢地域は少し違う結果になるのではないかと思います。

それでは、今日はこの転入をキーワードにさせていただいて自由にご意見いただければと思います。いかがでしょうか。

委員)

国勢調査の現実からいくと、確か三重県は人口減少率が 2.5%ぐらいで、津市が 1.9%、松阪市は 2.8%か 2.9%だったと思います。ちょうど津市以北と松阪市以南で人口減少率が分かれていたと思います。

三重県の南北問題というものをお聞きになったことがあるかと思いますが、松阪市以南地域の三重県と、津市以北の三重県では、確か人口減少率が 3 倍から 4 倍近く違ったと思います。よく松阪市は南三重という言い方をしますが、やはり南地域での連携をしっかりしていけないといけなかなと思います。

事務局)

補足だけさせていただきますと、平成 27 年と令和 2 年の比較ですが、三重県全体の人口減少率が 2.51%、松阪市の減少率が 2.88%、津市の減少率が 1.91%となっております。津市を境にして三重県北部の減少率を見ますと 1.35%、南部で 5.33%の減少となっております。

委員)

就職で U ターンというものがあり、一旦就職で外に行った人が戻ってくるというものがありますが、転入に U ターン・I ターンで帰ってくる人も入っているということでしょうか。

会長)

そうですね。U ターン、I ターンが多いかという点、松阪市に関しては割と県外から移ってきていて、そのあたりサンプル数は少ないのですが、I ターンのような気がします。

委員)

商工会議所なのですが、わくわくスクールといって経営者の皆さんに中学校で出張授業をしていただいたり、中高生時のインターンシップなどで若年者の時に事業所のことを知ってもらっていないと、一旦外へ出ていった時になかなか戻って来てくれないです。

また、学生就職情報センターといって、大卒者が地元へ就職するための企業セミナーをしています。若い時に地元のことを色々知ってもらう必要があると思います。

事業所のことを知ってもらうのが産業界的には良いと思います。松阪市の事業所や企業、地元の人もそうだし、商工会議所で外に向けて情報発信していこうと取り組んでいます。

松阪豪商スピリット事業所認証制度という、豪商の精神を持っている事業所さんを認証する制度を去年の秋からやっており、儲けるだけでなく地域貢献もする企業を PR して地元だけでなく外に発信しています。

今の 30 代の人はどうかわかりませんが、自分の子供は中心部の学校に通っていたのです

が、歴史のことや町のイベントが多く自然と行事に参加していましたが、その時は興味を持っていませんでした。しかし、外に出てからその時の印象が残っていたのか、結局地元に戻ってきて事業をしています。やはり若い時に地域のことに対する経験があると将来地元へ戻ってくる可能性も高まる気がします。そういった意味で大事なのかなと思います。

これは個人的な話でしたが、地元のことを外に発信していくということは大事なのかなと思います。

会長)

松阪市の商工会議所の感覚では、事業所が人を雇おうとしているのか、それと起業という観点から松阪市はどうでしょうか。

委員)

創業起業に関しては、施策としていろいろやっていますが、突出して松阪市が創業起業しやすいまちではないと思います。創業起業支援というのは、ここ数年で市と商工会議所が連携して事業も行っているため、以前よりは創業起業しようとする人は増えています。ただ、地域内での創業ということなので、県外市外から来て松阪市で創業ということは増えていません。施策としては、創業セミナーなどでも松阪商人塾は市内だけではなく県内や全国にも発信しています。

会長)

地元の企業の雇用はどうですか。

委員)

業種によって違うのですが、雇用は実はすごく浮き沈みがあり、どちらかというと人材が不足していると思います。

実は今企業ガイダンスを開催しても、なかなか学生さんが集まらないのが現状です。バブル期は学生がたくさん来ましたが、今は人が不足しており人材に苦労しています。

会長)

政府の統計によると、20代・30代が1,000人動いています。結構動いているように見えますし、確かに県のデータを見ていると、転勤が多いです。しかしながら、一方で1,500人も転勤で移動したりするのかなと思ったりします。

委員)

一つの職場で定職というのがあまりなく、銀行でも転職が多いのでそういう時代の側面

もあるのかなと思います。

会長)

大台町の転入者が増えたということについて、何か感じますか。

委員)

昴学園という県外からの生徒を受け入れている高校があり、その影響があるのではないかと思います。

委員)

どのくらいみえますか。

委員)

わからないですが、受験の時など、県外の方が宿泊することもあります。

会長)

昴学園はどういう教育方針なのでしょう。

委員)

総合教育で、全寮制です。学生のなかでのキャリア教育をされているのではないのでしょうか。高校野球で話題となった白山高校の先生が昴学園に移られて、その野球部で学びたいという学生さんたちが入って来ているという話も聞きました。

私は地元が飯高ですが、飯南高校も学生が少なくなってきたので、昴学園もこのまま定員割れしてくるようだと学校の存続自体が危ぶまれると思うので、そうならないよう地域からも注目されて地域が盛り上げていこうと動き始めていると聞きました。

委員)

飯南高校も地元で就職する生徒がようやく数えるほど出てきました。卒業後は就職する生徒が多いのですが、県内中心に松阪から出て就職してしまうよりも、地元の企業が少しずつ人材を確保できるようになってきたという印象です。続くかどうかはわかりませんが。

会長からいただいた資料は、松阪市の移動は転出するにしろ、転入するにしろ、津市や伊勢市が多いです。

今、子供の高校進学について、行ける学校がこの圏域には少なく、どうしてもちょっと勉強しようと思うと津市の学校に出て行ってしまいます。

その子たちが戻ってくるのであればいいのですが、そうでないのであれば教育体制を強化していかないといけないと思います。

委員)

生活自体が難しいという側面もあります。飯高では中学校を卒業したら、高校では下宿か寮のある学校への進学という風潮なので、一度外に出て行ってしまって就職となると地元へ戻ってこなくなってしまうと思います。

まず高校への通学が難しく、バスや交通手段のことを含め、毎日通えるようなところというと、やはり下宿や寮になってしまうのかなと思います。

委員)

マイナビ就職の関係資料を見ると、一般論では確か地元の大学へ進学すると、7割ぐらいは地元へ就職したいという話でした。ただ、県外の大学へ進学した三重県出身者の場合は、地元に戻りたいかという質問に対して、20%ぐらいしかいなかったと思います。

やはり高校を卒業して大学へ進学する際に、三重県内の大学は限られているのでそこが厳しいと思います。

会長)

そのあたりは肌で感じていまして、三重大学であれば基本的に愛知・三重の出身者が多く、傾向的に他の大学と比べて地元就職志向が高いと思います。

弘前とか島根の学生さんは、1年生の時から東京や大阪で就職活動することを考えています。あとは雇用の問題です。三重大学であれば、ある程度地元企業への就職の支援体制がありますが、弘前や島根ではそれはなく、一度出ていくと帰ってきません。

定住自立圏で移住者を促進するといった時に、正直私はリターンなどの人ではなくて、外からゆかりのない人に来てもらったほうが良いと思います。

大学進学で外に出て行くと、親の介護など何か理由がないと帰ってこないと思います。

委員)

観光協会では、市民の皆さんが松阪は良いところと言えるような施策をしていかないといけないと思っています。

松阪は良いところと言う人が増えれば、外から来た人に対するおもてなしの仕方が変わると思います。そして、外から来た時に対応してもらった人や経験や体験によって、交流人口が関係人口、関係人口が定住人口になっていくことが大事だと思います。

松阪には蒲生氏郷、三井高利、松浦武一郎などたくさんの偉人がいらっしゃいます。そういう方々の偉業が顕彰できていないと思います。

教育の面では小中学生といったうちから、シビックプライドを醸成していかないといけないのかなと思います。観光の面からいけば、内需拡大をしつつ、外から来ていただけるような仕組みを考えていけたらいいなと思います。

会長)

具体的にありますか。

委員)

全く決まっていないことですが、偉人顕彰事業的な意味合い、できたら内需拡大的な意味で、例えば松浦武四郎記念館へ住民自治協議会の方が行っていただいたら、入場券の半額位を目途に補助して、松浦武四郎記念館の学芸員の方の話を聞くのはどうか。また、小津安二郎記念館や本居宣長記念館でも同じようなことをしてはどうかと思っています。

あと、会員さんと市民の皆さんと連携していくことが大事だと思っています。観光協会の正規職員は5.6人ぐらいしかいないので、他力で総合力を上げていきたいと思っています。

例えば、会員さんのアイデアを募集して実証実験し、次のステップに行けるようにしていきたいと思っています。

委員)

20代・30代の人に来てもらうって考えた時に、多気町に移住した方に移住の理由を聞くと割と決定打となったのは小さなイベントであったりすることが分かってきました。

例えば、たまたま地域の餅撒きに参加し、地域の人と知り合い、地域のことを聞く中でこんな所に住んだら子育てによさそうとか、子供が楽しそうにしているのを見る。そういった経験があると、他の地域に行ったときに、「やっぱりあの地域が気になる」となった事例をいくつか聞きました。

私は民泊をしているので、都会など違う地域から泊まりに来てくれた8人ぐらいの男性で20代の方中心に40代までの方とどんなまちに住みたいかという座談会をしました。

皆さん大体ここへ住みたいと言ってくれ、「子供と一緒に遊びたい」とか「仕事さえあれば」とか言われるのですが、仕事がなかったとしても多少遠くても通えるなら行きたいと言ってもらえました。

外から来た人を受け入れてくれる心の広さがあり、その人と交流できるような小さな地域のイベントがあって、移住体験ができるような宿泊場所がある。そういうところを一つアンテナとできるような仕掛けや、定住できるのかなと考える機会をもっと発信していければいいのかなと思います。

皆さん、多少遠くても仕事に通うのは良いみたいで、意外と都会の人ほど電車通勤も苦にならないようでした。

会長)

移住関係とか管轄とかはあるのですか。

委員)

地域づくり連携課で空き家バンクとか、移住の関係で連携をするために活動をしています。観光協会としては、空き家を見に来られた方々に対して、「お店紹介」という形でQRコードを読み込むと、地域のお店が会計時に割引になるクーポンを考えていて、提供していただけのお店を募集しています。せっかく空き家バンクを見に来てもらったので、そういう方にクーポンをお渡ししてできれば食事をして帰ってもらおうかというような仕組みを考えています。

この間「松阪の一夜」というイベントがありましたが、その時に阪神交通社さんが県外から誘客していただいて、その方々に添乗員さんを通じてクーポンを配布しました。

会長)

交流人口を増やそうとしてもどこか一つの機関ではできないので、地元で活動されているような方・県・観光協会それぞれが上手く役割分担して関わらないといけないと思います。

委員)

私の活動としては、小学校を軸にして移住者を増やす取組をしています。去年も結構な成果を上げましたし、今年も割と頑張っているのもそれを言わないといけないと思っていたのですが、資料1の一番最後、生活環境の重視した点の中で「子育て支援」、「教育環境」が0なのがショックを受けました。

確かに子供に教育環境を求めて問い合わせてくる方は多くいて、自然環境・教育環境・人のつながりとかすごく言われます。勉強ができる子が多いのですが、勉強ができるだけじゃなくてというような贅沢な生き方をしている人が多くいます。

全体として施策に影響を及ぼすものじゃないのかな。と。

委員)

肌感覚ではわかります。教育というものはすごく大事だと思います。

民泊に来ている方でこの地域は多様性に対してどのくらい理解があるかと聞かれた方がいました。違う地域で里親の施設をされていて、子供たちをたくさん預かっているそうです。

地域によっては子供たちがいじめられたりするので、そういうことがない温かい地域に行きたいとなります。また、その時の教育環境をすごく気にされてみえて、一民泊業をやっていてそういうことがあるぐらいなので、もっと要望はあるかと思います。

委員)

小さい学校で合併せずにインターンシップを受け入れるというのは一つの方法だと思います。アンケートを取ると大規模校が嫌で来たのみまた合併かという意見がありました。

防災についても、能登半島の大地震がありました。が東南海で地震があれば紀伊半島沿岸

部は確実に同じような惨状になると思います。

そうすると、定住自立圏において防災に関してもいろいろな連携が必要かと思います。

圏域外の地域との連携があるのかなと思いつつも、二地域居住みたいな形で展開するのは有り得るのかなと思います。まるごと皆さんが防災のために引っ越すということはないと思いますので。

一方で先ほど企業の話もありましたけれども、工業団地に 6 つか 7 つの事業所がやってきましたけれども、そのうちの 2 つの事業所は明和町の浸水区域であったりします。

企業誘致も高度人材が三重県全体にいません。呼び込む意気込みはすごくあるのですが、最終的に人が集まらないといったこともあります。

会長)

教育の肌感覚について、教育にこういったことを求めてみえますか。

委員)

一番感じるのは、勉強以外の自然や生き方です。多様性を認められるようなところかと思っています。

委員)

教育をきっかけに移住までするというのは、どちらかというとポジティブなきっかけというより、課題を抱えている子供をなんとかしてあげたいという人が多いのでオープンに言いにくいのだと思います。

委員)

移住相談に、ネガティブな要素を汲んでくれる相談所があれば良いと思います。ポジティブ要素をおっしゃられる方は多いですし、そこから住むか住まないかという話になると、どうしても行政機関が相手になってきます。そうではなくて、ネガティブな、言いたくないような悩みを聞きつつ、その地域ではどういう実践事例があるとか、安心してもらえるような仕掛けがあればと思います。

委員)

多分、制度というよりも、初めに会える人にどれだけ惹かれるかということだと思います。

委員)

奈良県境であり限界集落が近いですが、今住んでいる人の半分近くが移住してきた人たちです。最初は来てくれることが地域の望みでした。定年退職や早期退職の方でセカンドハウスや、セカンドライフで来られて、80 歳や 90 歳になってもそのまま住んでいらっしゃる

方もみえます。そういった方々に来た理由を聞くと、最初に話をした方々がすごく良かった。という話がありました。田舎のお節介や世話焼きさんが対応に行くと、ウェルカムみたいな感じでそのまま定住されたということもあります。

そういう小さなコミュニティというか、今の若い人は生活をどう立てていくか課題はありますが、やはり最初の印象が大事なのかなと思います。

委員)

松阪市の空き家バンクは地元の方が面談をすることになっており、最初に地元の方は嫌なことも含めて言いましょうという前提になっています。地元の人が嫌なことも含めて言ってくれるので、相談者も安心感があると思います。

委員)

地元面談は終盤になってからあります。一回見てもらって、気に入ってもらって担当者さんと大家さんが入って、もう一回ぐらい具体的に大家さんと家賃や修繕の話をしてもらって、いよいよ住むぞという決意ができてから面談になります。

面談で地元から断られることもあります。そのための制度で、その時の自治会長さんの感じが良かったから安心して来られるという方もみえます。

会長)

今は交流人口中心で話が展開していますが、他に何かありますか。例えばこれを皮切りに雇用がどうかなど。観光協会はどうか。

委員)

私は松阪を良いねと言っていただく市民の方を一人でも増やすことが交流人口の増加につながっていると思うので、そのためにイベントであったり番組であったりというのは必要だと思いますし、地道な活動として、例えばおいしい店があるなどの情報を出していくことが大事だと思います。

あと、雇用ということについてはすごく難しいです。観光が推進されれば個人事業主が増えると思います。大企業を誘致する良さは当然あるのですが、もしその大企業が撤退してしまったらそのまま人口ごとなくなってしまう。そういう意味では、観光からの小規模事業主が増えるので、そういうリスクは回避できるかなと思います。交流人口を増やすことによって、1人、2人と開業される方が増えていくというのは産業全体としてももしかすると下支えになるかもしれません。

委員)

長谷川邸の近くで2件ぐらい古民家が新しい店になります。今度オープンするところは

津市から来ている方がされてみえます。起業しやすいまちとか、空き家とか空き店舗とかそういうところで商売をしてくれる人が出てくれば良いと思います。創業事業は7、8年やっているのですが、市外・県外から松阪で商売する人が2件あるだけでも成果はあるのかなと思います。地道に長く続けて少しずつでも増やしていくことは大事だと思います。

委員)

海士町を調べてみたのですが、移住者がこの15年で850人とのこと。ブログの中には移住は失敗だったというものもありましたが、地域づくりということで持ち込むことも大いに可能であると思います。

あと、有名なレストランがあると違うかと思います。例えばヴィゾンの中のイタリアンのお店で、有名なシェフが全国から人を集めているほか、有名なパティシエなど、地域づくりの話題について核になるようなところがあると思います。

会長)

繰り返しになるのですが、今日は次回以降にテーマを絞っていくために自由にお話しただきましたが、教育、交流人口、あとは観光についてお話しただきました。内容としては、観光でも地元財産の発掘。それから創業支援。医療もあるのですが、医療はちょっと置いておいてもいいと思います。あまり体制もわからないので。

委員)

松阪は総合病院があり、他所の市町と比べると医療体制は相当ハイレベルかと思います。

会長)

他の市町はどうでしょうか。今言ったところ以外でどうでしょう。

委員)

障がい者雇用が弱いと思います。障がい者雇用の良いところは、親がついてきて定住につながるがあると思います。もう少し障がい者雇用が進むような仕組みがあれば、自然に障がい者支援を行うところや、就労場所ができたりすると思います。学校はあるにはありますが、機能できていないと思います。圏域で考えたほうが良いと思います。障がい者だけではないかもしれないですけど、どんな人も働けるという視点も良いと思います。

委員)

障がい者雇用が進んでいる地域はどこなのですか。

委員)

三重県は全国の中で真ん中ぐらいまで上がったのですが、三重県内で言うと、鈴鹿市や四日市市は企業も多く、たくさん雇用されています。そこで働く人やそこに関わる人が集まるというのが大きいと思います。松阪市は大きな病院が2つあり、精神疾患がある方が多いと思いますが、その方々が働いているかと言われるとそうではなく、医療で終わってしまっていることが残念です。

医療から地域、就労に移行する仕組みができるともっと人が集まると思います。

委員)

行政で先進的なことをして話題を作ると、全国から自治体が視察に来ます。北海道のニセコ町が自治基本条例を制定し、全国の自治体関係者がニセコに視察に行きました。

会長)

今基本的に移住者を想定して議論をしてもらっています。今度は逆に今住んでいる皆さんにとって、この地域に何が欠けているか聞いてみたいと思います。なかなか言いにくい事と思いますが。

そういったニーズ等が実は調べにくいものです。住んでいるからこそ分かる、何がこの地域に必要なのか。ここでの生活がどうみえるのか。

私も今は大阪に移っていますが、嬉野に住んでいた時の感覚で言うと、交通問題が難しいと思います。最寄り駅は伊勢中川駅でしたが、そこでさえ地域交通の中心になりません。そこからバスが出て、そこから車で生活圏が形成されるような環境ではありませんでした。

生活するためには、駅前まで出てくることできれば非常に便利ではありました。駅には特急も急行も止まるので通勤・通学も非常に便利です。

ただ、あの規模の駅でさえ、地域交通の拠点となれていないのがネックかと思います。

委員)

松阪駅前には実はスーパーがありません。自分の親がいてスーパーで総菜を買おうと思うと、長月町というところまで行かないといけません。意外と駅前に住んでいながら、生活用品などがないという逆現象が起こっています。

電車が近いのと、タクシーがあるのは良いことです。

委員)

私も車が乗れなくなったら終わりだと思っています。車が安全に乗れているうちは良いと思うのですが、乗れなくなってきたときに頼れる人もいないですし、知り合いがいるわけでもないで住むことが難しくなると思います。最終的に都会に住もうかなということも考えています。

会長)

子育てについて考えてもなかなかそのあたりってネックで。学校が合併してしまうと、学校の友達との距離が遠くなってしまい、部活が終わった後に友達と遊ぶことができなくなってしまいます。そうすると、他の地域の聞き取りでは「この地域はもういい」「できれば早く出ていきたい」という考えになってしまう方もみえました。そのあたりがあると難しいですが、子供の人数が少なくなって非効率になってきたので合併するとなってもますます人が出ていくといった状況が生まれてしまいます。

委員)

私が子供の時には飯高町内に 7 つの小学校があったのですが、どんどん学校が統合していった今は 2 校しかありません。人口が減ってきているのは実感していますが、学校統合する中で、学校から帰ってきて友達のところへ遊びに行くためには交通手段がないので、祖父母に送ってってもらったりしていた。そういうことで子供たち同士のコミュニティを保てて来たのですが、かといって今は学童もないですし、親の送り迎えや、公共交通機関がないので、塾に行ったとしても親の送り迎えが必要となります。車の移動手段がないと、生活を続けていくことはなかなか難しいと思います。

会長)

ありがとうございました。これだけ意見が出ると思わなかったので少し驚いています。

では時間もまいりましたので、最後の事項書 3「その他」です。事務局から連絡があるようですので、お願いします。

事務局)

本日はご議論いただき、ありがとうございました。

事務局からの連絡事項として、本会の開催についてでございます。

令和 5 年度の開催については、本日で終了となります。

来年度のスケジュール予定ですが、6 月初旬・10 月・年が明けて 2 月と年 3 回の開催を予定しております。来年度は第 3 次共生ビジョンの策定年度であるため、6 月初旬の第 1 回目までに議論いただいた内容で、第 3 次共生ビジョンの骨子の材料を揃え、深井会長と協議をさせていただきながら 10 月の 2 回目に委員の皆さまに中間案を提示できればと考えております。そして、年が明けて 2 月の懇談会で最終確認をしていただく形になると考えております。

以上でございます。

会長)

委員の皆さまから何かご発言はございますか。

以上で全ての協議事項が終わりましたので、本日の会議はこれにて終了します。皆さま、お疲れさまでした。

(16 時 00 分終了)